

【 宮城県本吉郡南三陸町の方言概観 】

ここでは、今回の会話集に現れた特徴を中心に、伝統的な南三陸町方言の音声や文法を概観していきます。

㊦ 音 声

【子音】

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは平たく言えば、単語の頭以外にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になることです。専門的には、母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になることで、有声化と呼びます。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません（下の例で言えば柿は「ガギ」にはなりません）。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ
タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

今回の会話集にも次のように有声化の例が多く見られます。

例) カ行/k/→/g/ : マサガ (まさか)、ムガシ (昔)、スミヤギ (炭焼き) など。
タ行/t/→/d/ : シコ^oド (仕事)、ネデモオギデモ (寝ても起きてても) など。

ただし、これらは完全にガ行やダ行に発音されるわけではなく、個人差や語によってもその程度は異なります。共通語の発音よりはやや濁っているといった程度の発音も多く聞かれます。会話集では、清音、濁音で迷うような軽度の有声化音もガ行・ダ行の文字で表示してあります。

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞上記のとおり、単語の頭以外にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルになってしまい、「上げる」と混同しそうですが、「上げる」のゲが鼻にかかった

音（鼻濁音とも言い、この現象を鼻音化と言います。ここでは「ケ°」のように半濁点で表記します）のアケ°ルとなり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アケ°ル

となって、両者の混同は起こりません。同様にダ・ザ・バ行も鼻音化します（ここでは「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記します）が、これらは衰微が著しく、高年層からも聞かれないことがあります。今回の会話集からそれらの例を挙げると次のようなものがあります。

例) ガ行：中学校 → チューカ°ッコ
ダ行：窓 → マンド
ザ行：風 → カンゼ
バ行：おばあさん → オンバーサン

▼キ（キャ行）の口蓋化

キが「チ」に近く発音される。また、キャ、キユ、キヨも「チャ、チュ、チョ」と似たように発音される。

☞一般的にはこれは「口蓋化」の一種と見られています。口蓋化とは舌の前の部分が上あご（硬口蓋）に接近する現象を言います。キがキとシの中間のような音になるという似た現象は東北一般で見られますが、南三陸町では極端な口蓋化が起こってチに近くなります。例として、会話集に見られたものを取り上げます。

例) 機械（きかい） → チケ
来たな（きたな） → チタナ
今日（きょう） → チョ

また、「ギ」が「ジ」に発音されるのも口蓋化の一種です。

例) 吟味（ぎんみ） → ジンミ

【母音】

▼イとエの統合

イとエが同じ発音となる。

☞母音単独で発音されるイとエは区別されず、ともにエに近い音になります。

例) 息 (いき)、駅 (えき) → 両方ともエギ
鯉 (こい)、声 (こえ) → 両方ともコエ

ただし、この特徴も弱まってきており、イとエが似たような発音になるものの、完全に同じではなく、一応区別はするという状態になりつつあるようです。

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象（またはその逆も）を「中舌化」（ちゅうぜつか、なかじたか）と言いますが、南三陸町ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミとム、リとルなどは互いに近い音になります。これらは一応の区別がありますが、シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」と発音され、これらは区別がありません。今回の会話集に見られる中舌化の例を挙げてみましょう。

例) 七十 (しちじゅう) → スツジュ
地震 (じしん) → ズスン
何 (ナニ) → ナーヌー

▼シュ、ジュ、チュの直音化

シュが「ス」、ジュが「ズ」、チュが「ツ」と発音される。

☞これに上記の中舌化も合わせると、シ・ス・シュがすべて「ス」、ジ・ズ・ジュがすべて「ズ」、チ・ツ・チュがすべて「ツ」という発音となります。いわゆるズーズー弁というのはこの特徴に注目した言い方です。今回の会話集に挙げた中にはあまり多く見られませんが、会話集以外のところでは次のような例があります。

例) 爺さん (じいさん)、十三 (じゅうさん) → 両方ともズーサン
手術 (しゅじゅつ) → スズツツ
注射 (ちゅうしゃ) → ツーシャ

現在ではこの中舌化の特徴も弱まりつつあり、シとス、ジとズ、チとツが、似た発音ではあるものの一応の区別はなされている、という段階に入りつつあります。共通語とあまり変わらない発音が聞かれることも多くなっています。

▼母音連続の融合

アイ・アエが「エー」「エァ」と発音される。

☞一般的にアイ・アエという母音の連続（連母音）は融合して[ɛ:]（共通語のエー[e:]よりも口を開いて発音する）と発音されますが、南三陸町では/ɛ/~ae/のように広めに発音されたり融合せずに発音されたりすることもあります。また伸ばさずに「エ」と短く発音されることもあります。会話集から融合した例を挙げると次のようなものがあります。

例) 一杯（いっぱい） → イッペ
機械（きかい） → チケ
迎え（むかえ） → ムゲ

▼その他、以下のような特徴もあります。

・ヒの音がシに近い音となる。

例) 一人（ヒトリ） → シトリ
昼間（シルマ） → シルマ
次の日（ツギノヒ） → ツキ°ノシ

・サ行の音がハ行音になる。

例) そして → ホシテ
作った（コサエタ） → コヒェダ

・rの子音が無声化する。これは後ろ（ウシロ）のrが発音されずに「ウッショ」になるような現象のことである。

例) 乗せられて（ノセラレテ） → ノシエラエデ
流された（ナガサレタ） → ナカ°サイダ

¶ アクセント

南三陸町は、仙台市以南の無型アクセント地域とは異なり、東京式アクセントに準ずる型をもつ有型アクセントをもっています。

☞例えば「橋」と「箸」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハとシの音の高低が決まっています（＝型がある）、それによって単語の区別が付きませんが、無型アクセント地域では高低が決まっていない（＝型がない）ため、区別されません。南三陸町は有形アクセントの地域で、「橋が」と「箸が」の高く発音される所を太字で示すと、それぞれ「ハシガ～ハ**シガ**」、「ハ**シガ**」のように異なった発音をしております。高年層においては、共通語の〔ハシガ〕のように単語の頭が高い発音はあまり聞かれません。ただし、世代が下るにつれ共通語化が進み、若い世代では、そうした単語の頭が高いアクセントも聞かれるようになってきています。

㉑ 文 法

【格助詞】

▼「が」、「を」の不使用

共通語の「が」格、「を」格が無助詞で表示されることが多い。

☞共通語の「が」のような主格を表す助詞や、「を」のような目的格を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることが多いです。

例) 主格 : オレ ケツカラ コ (俺があげるから来い)
目的格 : タラスモズ コシエダ (たらし餅を作った)

▼「サ」

共通語の「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところが多いですが、存在の場所を表す「ここサある」は言えないなど、その用法は「に」とは若干の違いがあります（ただし、若年層では存在の場所を表す「サ」も使えるという報告もあります）。

例) 草取りサ行く
オライサインビヤ (うちに行こうよ)
田んぼサ来る

【助動詞】

▼「べ」

共通語の「～だろう」(推量)や「～しよう」(意志)に相当する助動詞に「べ」がある。

☞「べ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。会話集のものではありませんが、次のように使用します。

例) 明日、雨だべ (明日雨だろう) <推量>
明日は早く起きッペ (明日は早く起きよう) <意志>
お祭り、お前も行くべ? (お祭り、お前も行くだろう?) <確認>
みんなでがんばッペ (みんなでがんばろう) <勧誘>

▼「タ」「タッタ」

「タ」は共通語の過去・完了の助動詞「た」よりも用法が広く、現在目の前にあることの確認などにも使われる。また、「タッタ」は過去の思い出など、現在と切り離された過去で用いられる。

例) (Bちゃん) イダノ → (Bちゃん) いるの
(Bちゃん) イダッタノ → (Bちゃん) いたの

【終助詞】

▼「チャ」

強調、当然、働きかけの意味を表す「チャ」が用いられる。

☞具体的には、相手が知っているはずの事柄を示し確認させるなどの機能があり、共通語の「でしょ」「じゃない(か)」「よね」などのような意味を持ちます。

例) サッキサ カリダイッチャ アノ スコップ
(さっきさ 借りたじゃない あのスコップ)

★その他、以下のような特徴もあります。

- ・逆接既定条件 (共通語の「けれども」) は南三陸では「ゲットモ」が用いられやすい。
- 順接既定条件 (共通語の「から」) は「ガラ」が用いられる。

- 例) イマワ チカイダゲットモサ (今は 機械だけれどもさ)
コシエダゲットモ (作ったけれども)
ワカンネーゲットモサ (わからないけれどもさ)

・待遇表現は「ス」「(デ) ガス」「(デ) ゴザリス」「イ (ン)」などが用いられる。

- 例) 取りス (取ります)
んデガス (そうです)
おはよゴザリス (おはようございます)
お茶でも飲まイン (お茶でも飲みなさい)

【参考文献】

- 加藤正信 (1969) 「東北方言概論」『言語生活』210
加藤正信 (1992) 「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院
佐藤亨 (1982) 「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
小林隆編(2012)『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室
東北大学方言研究センター (2012)『方言を救う、方言で救うー3.11 被災地からの提言ー』
ひつじ書房